



## episode 2 わたしの絵日記

投稿者 H・C さま(兵庫県)



『ねえ、わたしのことすき?』  
 カール・ノラック 作  
 クロード・K・デュボワ 絵  
 河野万里子 訳  
 ほるぷ出版 2003年

私が6歳のときに両親からプレゼントされた

『ねえ、わたしのことすき?』という絵本は、私の人生の転換期をきり取ったような作品です。

私が6歳のとき、初めて弟が生まれましたが、この絵本の主人公“ロラ”も、弟“テオ”が生まれたばかりという設定。

お姉ちゃんになったことが嬉しいロラは、あの手この手でテオをお世話してあげるけれど、赤ちゃんに慣れていないせいで全部裏目に出て、テオを泣かせることになってしまう。

テオのことが大好きなのに、泣かせてしまったことを気にするロラ。しかし、思い切って、「ねえ、わたしのことすき?」と聞いてみると、テオは言葉がわからないなりにニコニコしてくれて、ロラはまた、お姉ちゃんとしての自信を取り戻すのでした。

このお話を20歳になった今、読み返してみると、とっても懐かしい思いになります。

それは、当時、このお話を繰り返し読んでいたからではなく、ロラの言動が、当時の私にあまりにも似ているからなのです。

私も6歳当時、弟ができたことがたまらなく嬉しかった。だから、寝ている弟にお気に入りの毛布を何枚も掛けてあげていたし、弟が泣いていたら歌を歌って慰めようとしていました。だって、お姉ちゃんだから。

でも、弟からしたら寝ているときの毛布は暑いし、泣いているときの歌声はうとうしいですよ。結局、私もロラと同じように、良かれと思ってしたことが逆に、弟を困らせてしまっていたのです。大声で泣く弟を見て、幼いながらも申し訳なく思いつつ、泣き止んだ後の、弟の可愛い寝顔を見て、お姉ちゃんとして、もっと頑張ろうと元気を出していたことも良い思い出です。

両親は、この絵本をお姉ちゃんになる心構えとしてプレゼントしてくれたのですが、今の私にとっては、自分の当時の日記のような懐かしさを覚えるのです。

『絵本の日アワード in FUKUOKA 2021』投稿作品より



本連載は「医療法人元気が湧く」が主催する“絵本の日アワード”に応募された作品を掲載していきます。毎年、300～450編の応募がある「絵本にまつわるエピソード」の作品から、「絵本の魅力」と「絵本のチカラ」のつまったエピソードを選び、その魅力と感動を読者の方々にも共有していただきたいと願って、投稿者の了解を得て紹介しています。さらに、人に影響を及ぼした絵本のバックグラウンドについて、司書の専門的な視点による解説を加え、一冊の絵本のある部分では“深く”、そしてある部分では“広く”、興味を広げていただきたいと企画しました。



## ベルギーの絵本事情

『ねえ、わたしのことすき?』は、『だいすきっていいたくて』にはじまる「ちいさなハムスター・ロラシシリーズ」9部作の5作目になります。原書出版国は、ベルギーです。ベルギーといえば、絵だけで物語る卓越したデッサン力で名高いガブリエル・バンサン氏を描いては語れません。多言語国家ベルギーのフランス語圏における絵本界で、アウトサイダーを物語に登場させ、消費社会に対して批判的な目を向けた最初の作家といわれています<sup>1)</sup>。

ベルギーという国は、神聖ローマ帝国の支配下にあった時代、オランダとともに「ネーデルラント」と呼ばれる一つの地域でした。オランダは17世紀に独立しますが、ベルギーが紆余曲折を経て独立国となったのは1839年です。しかし、独立後もオランダ語系住民とフランス語系住民の対立(言語戦争)が続き、児童書の分野においてオランダに遅れをとることになります<sup>1)</sup>。

ベルギーの人口のうち約60%がオランダ語、40%弱がフランス語、ごく一部ドイツ語の3つを公用語とし、それらの言語を軸に異なる文化、生活が成り立っています。絵本においても言語圏によって成り立ちは異なります。つまり、ベルギーの絵本について語るとき、多民族文化の歴史に着目する必要があります。

北部オランダ語圏のイラストは、くっきりとした線と色鮮やかで洗練された作風のゲルマン系で、一方、南部フランス語圏は、柔らかい線と色彩が魅力的なラテン系なのです<sup>2)</sup>。

## バンサンのタッチに似ていませんか?

イラストレーターのクロード・K・デュボワ氏は、ベルギー・ワロン地方のアーティストです。ワロン地方は南部フランス語圏ですので、ラテン系というわけです。「ロラシシリーズ」のタッチは、ラテン系を象徴するような柔らかい線と色彩そのもので、どことなくバンサン氏を彷彿させるのも、ベルギー南部

の文化が伝わってくるようです。

ところが、『レアの星』(くもん出版)などデュボワ氏初期の作品は、正反対のくっきりとした太い線で描かれているのです。現在の、繊細な線で描かれたスケッチ風のタッチやモノクロに近い淡い色彩をみると、バンサン氏へのオマージュがあったようにも受け止められます。「言葉を超えた何かを共有したい」という思いを制作の原点にもつデュボワ氏は、いま注目すべきベルギーの作家です<sup>3)</sup>。



## Hello! カール・ノラック

「ロラシシリーズ」の作者カール・ノラック氏もワロン地方生まれで、フランス在住の作家です。1986年に児童文学の分野でデビューし、10年後の1996年にロラシシリーズ第1作の『だいすきっていいたくて』で、モントレイユ児童書展においてLivrimages賞を受賞しました。

モントレイユ児童書展とは、フランス国内で最大規模を誇る児童書専門のブックフェアです。イタリア・ボローニャの見本市が出版商業者の国際的な商談の場であるのに対し、モントレイユは直接、現地の読者に向かって開かれるフェスティバルです。つまり、子どもたちも自由に参加できる開かれたブックフェアというわけです。



## ベルギーに親しみを込めて

3つの公用語をもつベルギーでは、言語戦争のうねりを受けて遅れをとった絵本でしたが、今やオランダとの国境も軽々と越えて、海外各国で翻訳出版されています。魅力的な絵とストーリーは、年代も言語区域も、国境をも越えて人々の心に伝わるのです。

### 文献

- 1) 野坂悦子：オランダとベルギーの子どもの本は、いま(国際子ども図書館講演会記録), 国立国会図書館 国際子ども図書館HP <https://www.kodomo.go.jp> 2011/7/23
- 2) 佐藤由美加：知られざるベルギー絵本の世界, 美術の窓 No.328, pp.82-84, 2011.
- 3) アンステイチュ・フランセ日本：ボンジュール! フランス絵本のひろば, アンステイチュ・フランセ日本HP <https://www.institutfrancais.jp/tokyo/> (2015)